




敗戦者 図鑑 Max





突然空が暗くなり、棗色に染まった。
よく見たら、あれはツツジのお尻だった。
ツツジ「ルビー？負けたら補習を受けるって
約束したんでしよう。どこに行ったのかしら？」

その巨大な体で地面を押さえつけたあげく、
下の町はまるで怯えているようで震えが止まらない。
が、素早く両足の隙間を潜った小さな敗戦者がいた。

ルビー「あはは、とんでもない絶景を見てしまったな。
ごちそうさま！」

ツツジ「そ、そんなところから抜けたのですね？
そんないたずらっ子にはお仕置きしないと！」

怒りが恥ずかしさかでツツジの顔が赤くなった。



できるだけ早くその恐怖の補習から逃げるため、多くの敗戦者トレーナーは巨大ツツジに向けて色んな攻撃を放った。

しかし、彼らを嘲笑うように、ツツジはパンストを脱いだ。
ツツジ「うふふ、今のわたくしは完全に無防備ですよ！
少女の肌すら傷つけない弱い攻撃なんて、
岩タイプのポケモンに勝てると思いますか！
みなさん頑張ってね〜」

どんな手を使っても傷つけることができないトレーナーに対し、巨大な少女が不敵な笑みを浮かべる。

ルビー「あらら…よく言うね。

その少女の肌は山でも簡単に砕くくせに。」

ルビー「く…苦しい！
でもなんて美しさ！あの小麦色の美肌から
健康で香ばしい匂いがする。
ああ僕はもうなにも知らない…」

四天王のフヨウを再チャレンジして
また負けたルビーは、
自身の圧力耐性の不足だと指摘され、
フヨウから特訓の誘いを受けた。
巨大少女の足の臭いに惑わされ、
恍惚とした状態のまま、
そのビルよりも大きい足指にキス
している。

フヨウ「アハハ！特訓に手伝って
気持ちいいこともできるなんて
—石二鳥！—

虫に刺されたに過ぎない軽いキスで
フヨウは興奮し、町から適当にビルを
掴んでま〇こに入れた。
選ばれたビルにいるこびとたちは
幸運か不幸か、本人しか知らない。

フヨウ「この少年に負けた前チャンピオンさんのお仕置きは、
ムウマージに任せよう！」

ダイゴ「もう特訓は十分だろ？ここから出して——！」



フエインタウンのどこかで、敗戦者用の特訓基地として使われている秘密温泉がある。

アスナ「今日の水温はさーいこう！」

大人しか分からない美酒にびったりだね！」

ルビー「所詮コーヒー牛乳なんだろ。」

アスナ「まだつつこむ気力はあるとは、

ずいぶんと余裕だね！もったときつい鍛錬いくよ！」

コータスの背中に耐熱トレーニングを

行っているルビーは、アスナの巨足からの蒸気も

耐えなければならぬ。

温度と湿度が上昇している間、

体に流したのは温泉の水か足の汗か知らない。

それにとっても奇妙な匂いが広がってルビーの

頭を侵食していく。

ルビー「体と精神を癒す巨大少女温泉…実に優雅だな！」



この度、トクサネシティに辿り着いたルビーはさっそく、ジムを挑戦することを決めた。

が、この町にはどことなく漂う違和感が感じる。

その疑念を明らかにする前、地面が大きく揺れ始めた。

遠くの建物が地震のペースで積み木のように飛び散っていく。

トクサネシティの双子ジムリーダー、

フウとランのお出ましになる。

元々子どもサイズのはずだが、今は極めて大きく見える。

フウ「へへへ：新しいチャレンジャーが来たみたい。

どこにいるの？」

ラン「ふふふ：もう箱庭に閉じ込めたんだよね？」

ゆっくり捜そう」

そう言って超能力者の双子が伏せて、

指で建物一つ一つ壊しながら、

無意識的に足をパカパカする。

まさかまさか、この町は哀れなチャレンジャーたちのために用意した箱庭という名のトラップだ。

この超ミニ箱庭都市にいる限り、トレーナーだけでなく、チャンピオンや伝説ポケモンでもおもちゃにされる運命からは逃れられない。

ルビー「うわ！くさっ！！もう無理、助けて〜」

思う存分町を踏み潰して汚れた双子の両足の隙間でできた不思議な空間が、ちようど良いマッサージ器になった。

ほこりと汗まみれの巨足で挟まれたルビーには、双子の両足の強烈な臭いがついた。

ラン「はやく足の掃除を。終わったらこの靴の分もね！あ、あなたの憧れのチャンピオンは中にいるよ！」
フウ「独り占めはんたいい！」
ぼくの靴もチャンピオン級の掃除がほしい〜」

ダイゴ「くはあ！もうこれ以上は！いつ帰れるのよ…」

ジム戦で負けたルビーが特訓を受けている間、急に巨大隕石が地球に迫ってくるって！トクサネシティにある宇宙科学研究所に、ロケットで隕石落下を防止する緊急計画に取り組んでいる。全人類の運命に関わる計画なので、多くの人が集まってきた。しかし、ロケットよりもでかいのは、双子の巨大な体と素足。


ルビー「ちよつと、このロケットの安全性について疑問があるんですけど?!」

ラン「ふふふ…人類の宇宙進出の第一歩は、あなたに決めたよ!」

フウ「いいな。」

ぼくも宇宙計画に参加したかったけど、どうやら大きすぎて…」






ラン「まさかフウがそんなに興味を持っているとは。じゃあ、あなたが発射台になってもらうね。」
ロケットを作るだけで経費を全部投げ込んだため、るくな発射台が用意されていない。
代わりに、巨大化したフウのチ○コで発射台の使命を果たす。
ランは一手でロケットを掴まって、フウのチ○コにはめ込んだ。

フウ「あ、あの…こんなの恥ずかしいよ。」
姉弟がイチャイチャしているところ、町の一部がその動きで砕けた。
その結果、ロケットの発射を見に来た観光客がフウとランの足に踏み潰されぺしゃんこになってしまった。

ロケットをうまく上昇させるには、
フウの勃起が必要不可欠だ。
いっぱい性欲を溜めるためランの足
を舐めているフウが、
姿勢を変える同時にまわりの町を壊した。
ラン「ダメよ…そこ、きたない！」
フウ「へへ汚いのは姉さんの足じゃなく、
このきれいな足に寄生しようとしている
虫たちだよ。そいつらの排除はお任せください！」

フウのあそこが充血して硬くなっている間、
前踏まれて足についている小人たちが絶望しながら
ランに食べられちゃった。
フウの勃起とともに、
操縦室にいるルビーはどんどん
膨らんでいる亀頭に押され、
残された空間が僅かだ。
ルビー「狭いよ！しぬうー！」



同じ血が流れているため、
双子の姿がまだ大きくなっていく。
ようやく、フウのチ○コが抑えられなく
大気層を越えた。この瞬間、
ロケットが最高の発射チャンスを迎えた。
ラン「5、4、3、2…」
足でフウのあそこを思い切りシコって、
人類の代表者ランがカウントダウンを始めた。

ルビー「待って！まだ心の準備が…やああ！」
カウントダウンが終わった瞬間、フウの
チ○コが噴火するようにロケットを発射させた。
やがて隕石が壊せれ、世界が救われた。
めでたしめでたし。
しかし、双子の巨大化すぎで
一片の慈悲もなく町を粉砕したお尻は、
隕石とどっちの脅威が高いか誰も知らない。

ライモンシティのジムの特製バトルフィールドで、少年は敗戦で罰を受けている。

虫のサイズまで縮小されたラクツが、

カミツレの股間の隙間に落ちないように必死にもがいている。

カミツレ「はあく気持ちいいの！」

もっともっと掻きまわして！わたしをクラクラして！

電撃からの快感に勝たないと、

電気タイプのポケモンには勝てないよ！」

興奮で赤くなったちようカワイイモデルさんは今、

まったく心の底の欲望を隠さず淫らな話をしている。

ラクツ「こんなの電気タイプの特訓じゃないだろ！

いや変な水出てるぞ！助けて！」

縮小された少年が大声で許しを乞っているが、

どうやら美少女モデルに愛玩道具としか扱われていないようだ。

巨大化したカミツレとファイツが簡単に屋上を破って出たのを見て、ポケモンセンターにいる人たちが慌てて逃げ出した。一歩遅れたヒュウがファイツの足指の隙間に挟まれ、巨大少女からの無慈悲な罰を受けざるを得ない。

ファイツ「うふふ…ポケモンたちを閉じ込めた邪悪な建物が壊れたんで、今日もいい事やったね！」

ラクツ「なに！おまえたちの体にはいったい何の秘密が？まさか人とポケモンの遺伝子の融合を研究している情報が本当なのか…？あわあ！」

まだその独り言が途中にもかかわらず、ラクツがファイツのお尻に押しつけられた。ある漆黒の穴の真ん前だ。

カミツレ「そんなに少女の体の秘密を知りたいのか？ラクツ君ってエッチなんだね！どうしても知りたいのなら…ラクツ君にだけわたしの一番秘密の場所を見せるよ〜！」

ファイツ「うう…そんなに吸わないでよ！恥ずかしい…」
ベッドに横になったファイツがそのミルクに満ちた巨乳張って、熱く赤く見える。
彼女の体に乗っている二人の少年がただいま、勝利者の権利を行使している。

無我夢中でミルク溢れるほど膨らんだ乳首を吸って、
いつの間にか全身暖かい白い液体まみれになった。
股間のもはもう石のように硬くなってズボン越してその柔らかい巨乳を擦る。
ファイツの体がエロ過ぎでしかたない。

『この度はハリウッドにお誘いいただきありがとうございますとございます。
本日は映画の撮影に協力します。』

『今回のシナリオはまったく新しく面白いですよ。』

——静かな街に、突然建物の倒れた音が響いた。

柔い白い謎のモノが街中に振動とともにぶにぶにしている。

ラクツ「お：おまえ、なんでそんなに大きくなった！」

ファイツ「だって、わたしは悪役モンスターをとめているもん！」

間もなくその巨乳が落下し多くの建物を破壊した。

巨大で弾力的な乳首の下に、


ラクツがクモの糸に捕まった虫のようにもがいている。

『今度はみんな知っているキャラ——フタチマル登場です!』

そうは思っているが、ファイツがまだ巨大サイズを維持している。
ラクツに合わせるためタマゲタケ少女姿をした。
いくら顔を隠そうとしても、
服を限界まで膨らんでいつ突破してもおかしくない
巨乳は隠れることができない。

ラクツ「このまま悪者たちの本拠をぶっ壊すぞ!
おっぱい挟み攻撃!」
ファイツ「ずいぶん楽しんでるね…
いや、わたしだって負けないよ!」

巨大なおっぱいを揺らして一気に邪魔な建物を粉碎した後、
敵の本部を挟んだ。
なんだか正義のヒーローであるわたしこそ怪獣に見えるね。



ようやく撮影が終わって普段着に着替えたけど、
ファイツの体が元に戻っていない。
何故ならば、彼女はまだ満足していないからだ。
パーフェクトパツフォーマーで気合満々なファイツがだんだん熱く感じる。
そして巨乳からミルクを分泌され、
間もなく香り溢れる津波になった。
匂い立つ白い奔流が一瞬でスタジオを突破し、
激しい勢いで街に流れる。

ラクツ「はあ、毎回毎回こんなに疲れるのは勘弁!」



シロナの家でアフタヌーンティーをいただいた四天王シキミは、
帰りの道に大きくなった。

「このドリンクは栄養豊富で創作に役立つよ！」
そうシロナがおっしゃったはず。

明らかにこれは栄養豊富過ぎのようだ。
驚いたシキミはうっかり転んだ。

その結果、幾多の建物施設がそのお尻に粉碎された。

シキミ「創作のひらめきが…ああ！次の小説は巨大少女を主人公にしよう！」



ドンッとホミカが巨大な足を下ろし、
ジム戦に負けたラクツを踏んだ。

ホミカ「やっぱりあんたも相手にならないか？

前の挑戦者みたにおれの靴に入って毒耐性特訓だ！」

ラクツ「くっ…ライブしながらジム戦するなんて…！」


多くの人の前で敗れるのは大恥だな！」

恥をかいたラクツはホミカからの逃走を試みたが、
巨足に踏まれて全然動けない。

もつとヤバイのは、


彼は自分の体が小さくなるのを感じている。

ラクツ「誰か…助けてよ！」




ラクツツ「もうダメ！臭すぎ！今すぐ出たい！」
いやとしてもホミカの靴に入れられたラクツツが、
巨大な足指の本に蹂躪される。
チャレンジャーに勝ったホミカは観衆の歓声を浴びながら、
もっと激しくライブを始めた。
足の汗が靴の中にだんだん熱くなって、
やがて毒の沼になった。

ラクツツ「うぐお！みんな力を合わせて脱出するんだ！おい？」
ラクツツよりも先に靴の中に閉じ込められたチェレンたちは、
すでに虫の息であった。
ホミカ「どうした、クソガキども？」
これほどの毒耐性特訓でも耐えられないのか？情けないな！」
そう言っで足を踏み、足指で微小で憐れな生物たちを挟む。




町の人々には、
昼寝に最適な日はずだった。
睡眠中のアイリスが
突然巨大化する前まではのんびり過ごした。
巨大なお尻が街を潰し、大地震を起こした。
熟睡中のアイリスがいびきをかいて、
丸見えの股間と悪い寝相を
全然気にしていない。
小麦色の足をちよつと伸ばしたら
簡単にビルを潰して砕いた。
アイリスを起こすために同盟を
結んだブラックとNが、
伝説ポケモンに乗って攻勢をかけた。
しかし、これでかえってまずくなるか
もしれない。



アイリス「あ…そこだめ。いやな蚊…」
イツシュ地方の伝説ポケモンの攻撃受けても
アイリスにとっては虫刺されに過ぎないようだ。
アイリスが寝言を言いながら、
無意識的に手を伸ばした。
ちようど少女の秘密な場所に
攻撃している伝説ポケモンを捕まえた。

指でアソコに押されたゼクロムと
レシラムが精いっぱいにかみなりと
あおいほのおを放したが、絶好の刺激になった。
この刺激でアイリスはさらに大きくなった。
巨大な足指がちようと近い建物に触れただけで、
セーフハウスだと信じられたビルが轟いて倒れた。



崩れた垣やひび割れた壁が肌についたまま、
再びその巨足が無慈悲に建物を踏み潰した。
ペしゃんこになる運命から逃れた人々が
慌てて隠れ場所を探しているが、
どこに逃げても黒いものに覆われた
空しか見えない。

よく見たらあれはアイリスの足の裏のようだ。
少し躊躇ったら多くの人が命を落として
無様にアイリスの足の汚れになった。

股間がかゆくて気持ち良すぎてやっと
アイリスが目覚めた。

でも、ここはどこでしょう？

ベッドがなくなっで、

代わりに目に映るものは平たい土と穴が
あいた石の塊しかない。

しかもお尻がびしょ濡れになった。

まさかおねしょでもしたのか？！

驚いたアイリスが座ったら、

石の塊が砂のように潰れてこぼれ落ちた。

アイリス「はは、なにこれ？面白いね！」

一方、海の向こう側に、
カづくでやっと脱出できた二匹の
伝説ポケモンが息を抜く暇もなく、
慌てて石の奔流から逃げ始めた。
巨大少女の蘇りにつれ、
海が反転して咆哮する猛獣に
化けてライモンシティを襲ってきた。
町がほとんど廃墟となり、
立っている建物はもう見えない。
住民たちがホドモエの跳ね橋を上げて
巨人を止めようとしても、
あっという間に越えられた。
ライモンシティが完全にその巨足で
壊される前に、
こぼれ落ちた建物のかけらだけが
住民たちの脱出路を塞いだ。



最初に届いたのは轟き、そして強烈な地震がやってきた。
「あれだよな？」パニックに陥った人たちがそう思っているが、
隠れる場所はどうしても見つからない。
地震と轟雷がピークになった時、空が真っ黒に染められた。
次の瞬間で全てが踏みつぶされた。
かつて町が存在した場所に、黒い足跡だけが残されている。

アイリス「あははっ！変なところに来たけど、なんだか気分が良いな！」
目覚めて結構時間経ったので、アイリスが舞嬢用の羽製ドレスを着た。
彼女は嬉しくて有頂天になって、まるで太陽神の化身で輝いている。
周りが灰色か緑のサンドだけ。踏むと気持ち良くなる。
彼女は自分がイツシュ地方にいるのを分らない。
人間にとっても越えられない山々が、彼女の足首にしか届かないようだ。
生き残れた人たちがどこに逃げても、巨大少女に踏み潰されちゃいそうだ。
女神からの無慈悲な審判とその結末を、人たちが震えて待つしかできない。

セレナ「うふふ！カロス地方のチャンピオンがミスしちゃって負けるなんて…」

少女に嘲笑われ、チャンピオンで有名な女優であるカルネが自分の失敗を認めざるを得ない。

勝負に勝ったセレナにおもちや扱いされるのを見て、

サーナイトも混ざった。

自分がマスターなのに、サーナイトの臭い足で無様に弄ばれている。

とても苦しいけど、自分に勝ったのは他人じゃなく可愛い女の子で幸いだ。

しかたなく事実を認めるのもチャンピオンとしての強さだ。

カルネ「うぐ…いいよ！それじゃ君たちに大人らしい魅力を見せてやる。」

ニーソを穿いたセレナの足で揉まれているカルネが、少女たちの巨大な足指をキスをした。

ルザミーネ「く……わたしがここで敗れるなんて！」
計画が完全にリーリエに壊された。
自分の娘であるリーリエがアローラ地方を救った
英雄になったのを見て、ルザミーネがとても恥ずかしく感じた。
しかし、彼女がウツロイドとの合体から分離されたせいで、
となりにいるグラジオと一緒に縮小された。」

リーリエ「あら、お母様とお兄様はまったく反省していないですね。
しっかりとお仕置きしないと。」
この機会を利用して、リーリエが兄のグラジオを靴に入れ、
容赦なく踏んでいる。
これでお兄様の窮屈な性格を治したらいいな。
妹である自分からの屈辱を受けたら、きっと大人しくなるでしょう。
さて、次はそこのお母さま…

また邪魔しようとしているウツロイドを踏み、
その憑依の企みを潰した。

でも、もうお母さまが自分勝手に動いているのは許しません。
ルザミーネ「何しているの？放しなさい！」

この言うこと聞かない悪い子！」

リーリエ「お母さまこそ悪い事ばかりしたので、
ちやんと中で反省してください。」

これが私の生活を壊したお母さまへの罰です。」

リーリエが無駄な反抗を無視し、

家族と世界の平和のため、ルザミーネも自分の靴に入れた。

左側がお母さまで、右側がお兄さまだ。

しっかりと自分の足の下で反省するって決めた。

お互いに理解する日まで。





アローラ地方はウルトラビーストからの破壊が止められ、
また平和に戻った。
それを長く保障するため、
少女と彼女のポケモンたちが見回りを始めた。
風のように町を通ったリリーエは
晴れやかな気持ちで巡回している。
巨大な少女が現れただけで人々は
心強くなり、興奮している。
その純白な靴に閉じ込められ踏まれている母と
兄の姿はもう誰も覚えていない。

IF編：お母さまがウルトラビーストになった

アローラ地方を救う作戦が失敗に終わった。

ウルトラスペースの中の無限とも言えるパワーがルザミーネに吸収された。

彼女が一つの動きをとったのを見て、人類が真の恐怖に陥った。

それは、彼女が自分の足で地球を挟んだことだ。

リーリエ「太陽も月も消えた！お母さまが一体何をしましたか？」

驚いている間、遥かなる地平線がだんだん混沌の霧に吞まれた。

実はあれがルザミーネの臭い足で汚染された大気層だ。

もはやその巨大な足指を認識できず、

人々が絶望しながら大陸の終結を待っている。

アローラ地方はもちろん破滅寸前だ。

ルザミーネ「ふふふ：娘が失敗して良かった。

可愛い憐れなこむしたちよ、

これから身の程を弁えさせてやる！」





